

セッション「啓蒙と経済学の形成—グローバルな視点から」：趣旨説明

組織者・田中秀夫（京都大学経済学研究科）

我が国の経済学史研究は新しい時代に焦点が移って久しい感があり、古典派経済学とその周辺の研究が、低調になっているのではないかと、若い研究者も十分に育っていないのではないかと、だとすれば、それはまずいのではないかと、という気持ちもあって共同研究を組織してきた。その主題は「啓蒙と経済学」の関係である。英語圏に限定して三年間行ない、その成果は『啓蒙のエピステーメと経済学の生誕』（京都大学学術出版会、2008年11月）と題する書物にまとめた。続いて視野を広げて「グローバルな視点から」として「啓蒙と経済学」の関係を取り上げて、共同研究をさらに三年間行なった。今年のセッションは三回目の発表であり、三年間の研究の全体の総括を行なう機会でもある。

今回は、啓蒙の知的伝統を視野に置いたうえで、アダム・スミスの経済学を分業論に重点を置いて読み説く、渡辺恵一氏の新解釈と、日本の啓蒙思想の典型を福澤諭吉に見る生越利昭氏の重厚な分析、そして組織者の「啓蒙の経済学」を思想史の広い文脈に位置づける試みという三本の報告を用意した。司会はメーザー、ヘーゲル、リストなどに業績をもつドイツ研究の原田哲史氏、討論者はイタリア啓蒙、特にナポリにおけるジェノヴェージ経済学の解明に長年取り組んでいる奥田敬氏となったが、それは過去二年間に共同研究の参加者が行なった分担とのバランスを考慮してのことである。

英米、フランス、ドイツ、イタリア、オランダその他の諸国、諸地域の啓蒙研究は凄まじい勢いで展開している。啓蒙の時代の経済思想の研究もきわめて活発に行なわれており、しかも啓蒙研究の一環として意識して行なわれる傾向が強くなっている。縦割りの経済学史からする古典派経済学の研究という格好ではなく（それもあがる）、思想史研究、歴史研究の一環として行なわれているのである。それはなぜか。アナール、フーコー、ハーバーマスの影響もあれば、ケンブリッジ学派の影響も大きい。またトムソンの民衆思想の研究系譜もある。その点は、不十分ながら、田中報告で触れられるであろう。

歴史研究は、現代研究への迂回的接近であることを否定する人はいないであろう。歴史とは「過去と現在の対話」であるとE・H・カーは述べたが、啓蒙時代の、あるいはそれぞれの啓蒙における経済思想の展開、経済学の形成を究明することは、現代の学問としての経済学の研究と教育に、そして経済文化のありように間接照明を当てることになる。

生産力も人口も生活水準も高まったにもかかわらず、環境破壊と気候変動、犯罪的ともいべき金融取引と大量貧民を生産している世界経済の現状を視野に置くとき、過去からの道を検証する歴史研究は、変動する経済と生活様式をどう馴致すべきか、またしうるか、また何を目標せばよいのか、目指しうるのかを考える縁になるであろう。18世紀啓蒙の時代にモデルがある主張しているのではない。それは郷愁に過ぎないであろう。しかし、過去にも視点を持ち、過去の思想家を参照しなければ、21世紀を迎えて、ますます複雑怪奇な世界になっていく現実に批判的に対峙する道具立てを一つ欠くことにもなるであろう。